〔研究ノート〕

徳川義禮の英国留学

――ユニテリアン告白の意味――

長沼秀明

はじめに
一　徳川義禮の英国留学
（一）　二枚の写真と一つの新聞記事
（二）　徳川義禮の英国時代
二　帰国後の徳川義禮
（一）　ユニテリアンの告白
（二）　ユニテリアンとは
（三）　英国のユニテリアン
（四）　ユニテリアン・ミッション
（五）　徳川義禮の議会活動
おわりに

はじめに

ここに二枚の写真がある（八五ページ）。徳川林政史研究所が所蔵する、この写真は、尾張徳川家第十八代当主の徳川義禮（よしあきら）を英国ロンドンで撮影したものである。

徳川義禮は、これまで、その人物像がまったくといってよいほど解明されていない。上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇一年）には、つぎのように簡潔な記述があるのみである。

一八六三―一九〇八。明治時代の華族。
文久三年九月一九日生まれ。讃岐高松藩主松平頼聡（よりとし）の次男。もと尾張名古屋藩主徳川慶勝の養子となり、明治一三年家督をつぐ。一七年侯爵。二三年貴族院議員。明治四一年五月一七日死去。四六歳。

ただし、宮崎幸恵は「徳川園の歴史的考察（二）　徳川義禮侯邸宅について」（『東海学園女子短期大学紀要』第二九号、一九九四年九月）および「徳川園の歴史的考察（三）　徳川義禮侯邸宅の庭園について」（同、第三〇号、一九九五年九月）において、明治三三年に完成した徳川義禮邸宅（尾張徳川家大曾根邸）の建築構成および庭園構成について解明し、彼が植物園の整備をしたこと、明治二六年に名古屋に移住したこと、そして、明治一三年に家督相続

し、一七年～二〇年に英国へ私費留学したが、渡航目的は不詳であること、欧州の庭園へ関心があったことを明らかにし、彼の事績を考えるうえで大きな手がかりを与えてくれている。

本稿は、尾張徳川家第十八代当主の徳川義禮（よしあきら）の英国留学時代を中心に、関連する重要な先行研究および今回発見された新出史料を紹介し、今後の研究の礎とすることを目的とするものである。

一　徳川義禮の英国留学

（一）　二枚の写真と一つの新聞記事

ロンドンで撮影された二枚の写真のうちの一枚には、徳川義禮のほか、野呂景義、吉田知行、堀鉞之丞の三人が写っている。それぞれの人物の略歴は、つぎのとおりである。

まず、野呂景義は、『国史大辞典』第一一巻（吉川弘文館、一九九〇年）に、つぎの記述がある。

一八五四―一九二三

日本の近代鉄鋼技術確立と鉄冶金学の発展につくした技術者。安政元年（一八五四）九月名古屋藩士野呂伊三郎の次男として名古屋に生まれる。明治十五年（一八八二）東京大学理学部採鉱冶金学科を卒業し、ひき続き大学においてクルト＝ネットーの下で冶金学を研究し、欧米に留学後帝国大学工科大学の教授兼農商務省技師となる。同二十三年古河の深川骸炭製造所でコークス配合技術を開発し、二十五年釜石鉱山田中製鉄所の顧問となり、二五トン高炉のコークス操業を成功に導き、日本の製鉄技術の基礎を築いた。二十四年『鉄業調』を起草し、製鉄所建設論を主張し、官営製鉄所の建設計画に参加したが、東京市水道鉄管事件の巻添えをくって帝国大学教授・農商務省技師を解任され、製鉄所建設にも関与しなくなった。しかしその後も技術者として活躍し鉄鋼技術に関する専門学会である日本鉄鋼協会の発足とともに初代会長となった。大正十二年（一九二三）九月八日没。七十歳。

［参考文献］飯田賢一『近代日本の技術と思想』

（長島　修）

つぎに、吉田知行は、藤田英昭「北海道開拓の発端と始動――尾張徳川家の場合――」（『徳川林政史研究所紀要』第四四号、二〇一〇年三月）により、八雲開拓に従事し、英国から帰国後に西洋酪農を八雲に導入したことが知られる。

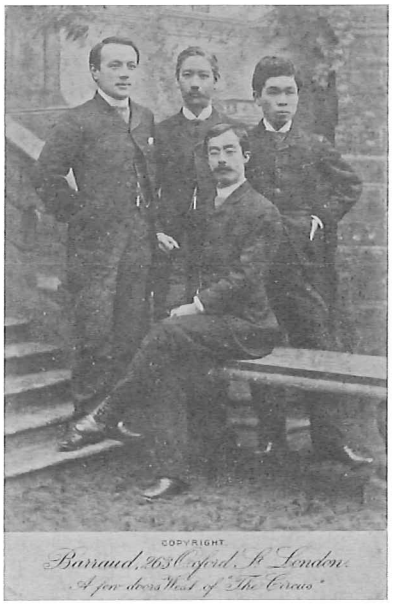
堀鉞之丞は、理学士（東京大学理学部卒業）で、『有機化学教科書』などの著作があり、帝国大学編『帝国大学一覧』（帝国大学、明治二〇年）には「純正化学科」「十八年七月卒業　堀鉞之丞　愛知」とあり、また、「堀鉞之丞君の叙任」という記事が『愛知学芸雑誌』第六六号（明治三〇年一〇月）「雑録」に掲載されている。

彼らは、英国ロンドンで、いったい何をしていたのであろうか。

このことを考えるうえで、たいへん興味深い一つの新聞記事がある。短い記事なので、全文を掲げよう。『讀賣新聞』明治二〇年一二月一七日（土曜日）第二面の記事である（なお、本稿では、特に断らない限り、傍線・網かけ等は引用者によるものである）。

○聖書研究　曩に英国倫敦より帰朝されし華族徳川義禮君には兼て倫

敦の有名なる學者ドクトルハム氏の元に在て教育を受けられたるよしにてハム氏はユニテリアン宗の教師の任を帶びて居らるるに付義禮君は氏より同宗の洗禮を受けイマニユルと云ふ名を得られたるが今度北英聖書會社の長坂某より聖書数十部を買上げ家扶の人々と日々聖書研究會を開き居らるるといふ



左　「野呂景義・義礼侯・吉田知行・堀鉞之丞」(撮影場所はロンドン、撮影者はMr. Barraud) 下記目録の資料番号一五五

右　「〔徳川義礼〕(明治一八年二月一五日母親に贈呈した写真)」(撮影場所はロンドン、撮影者はELLIOT&FRY) 下記目録の資料番号九三

いずれも「徳川林政史研究所所蔵写真資料目録」一〔『徳川林政史研究所研究紀要』第二六号、一九九二年三月〕による。

(ルビを省略し、変体仮名を現代仮名遣いにあらためた。)

この記事には、驚くべき内容が書かれている。徳川義禮は、英国でキリスト教の洗礼を受け、ユニテリアンとして聖書研究を開始したというのである。この記事を手がかりに、徳川義禮の英国時代を解明することができるのではないか。

(二)　徳川義禮の英国時代

まず、「ドクトルハム」なる人物とは、いったい誰なのか。

井上琢智は「イギリス留学生伊賀陽太郎宛書簡に見る日英交流(1)——イギリス人家庭教師ハムを中心に——」(『経済学論究』第六一巻第三号、二〇〇八年二月)において、この人物と同一人物と考えられるJ.Paton Hamをとりあげ、つぎのように詳細に語っている。

一八一九年、ロンドン生まれ。一八四〇年、エセックスのオンガー・アカデミーで学ぶ。翌年、チェスント・カレッジへ移り、一八四五年、バークシャーのハンティンダン伯爵夫人チャペル付の牧師となる。その後、いくつかの教会等で働き、一八五九年からは、ロンドンのエセックス・ストリート・チャペルの牧師となり、日本人留学生の世話をしながら一八九三年まで務めた。一八九四年から一八八八年までケンテッシュ・タウン・チャペルの牧師を務め、それを最後に引退(三ページより要約)。

その宗派は、ハムの住み込み生徒であった徳島出身の英学者井上十吉(一八六二—一九二九)によれば「ユニテリアンの牧師」であった。彼は

エセックス・ストリート・チャペルに二四年間かかわった後、ユニテリアン社会の諸事業を支援する組織に移り、その後、一八九四年六月当時「非国教会派教会(略)」と呼ばれる教会の牧師であった(四ページ)。

ハム一家と日本人とのかかわりについて、井上十吉は「余程前から日本人を同居せしめ世話をして呉れたもので第一番の萬里小路道房子の明治四(一八七一)年頃は始めとし大分沢山同居した者がある。私の覚えて居る所で伊賀陽太郎氏(伊賀〈氏広〉男爵の先人)、自由民権論で有名であった第一流の論客視せられた故馬場辰猪氏、一寸居たのは私と一緒に洋行した井上辨次郎氏(早世)、真宗派で南條博士と洋行した笠原研壽師、亀井茲明伯、和田垣〈謙三〉博士がある」と指摘している。事実、ハム自身も「私もしばしばあなた〈伊賀陽太郎〉や初期の古い日本人の友人のことを考えることがある」として磯野計、渡辺専次郎、萬里小路道房、鍋島直大、鍋島直柔、亀井茲明、松平忠敬、小泉信吉、中上川彦次郎、菊池大麓、井上十吉などを挙げている(五〜六ページ)。

文献②〔"Obituary-The Rev.J.Panton Ham," The Inquirer, Dec. 13, 1902〕はもっとも詳細な伝記であり、この資料にのみ「彼のロンドンの牧師時代の大半、ハム氏は主としてユニヴァーシティ・カレッジと連携して私的に生徒を引き受けた。彼らの中には数人の日本人生徒がおり、その中の何人かは後になって母国でもっとも高い地位についた」と紹介している(四ページ注四)。

ところで、この「ドクトルハム」と徳川義禮との関わりを考える際、決定的に重要な記述が、伊藤正徳編『加藤高明(上巻)』(加藤伯傳記編纂委員会、昭和四年)にある。該当箇所は左記のとおりである。

徳川義禮侯が、英國留學の爲め、新任の河瀬公使と同行で倫敦に着いたのは、明治十七年十一月の末であつたが、その舊藩主の萬端の世話は、結局伯〔加藤高明—引用者〕一人の引受ける所となつた。伯は先づ、義禮侯の住所を捜してハムスデッドに住むドクトル・ハムと云ふ宣教師の家庭を見附け出した。伯は、侯の修業の爲に『英國人の家庭』を主張したもので、随行家扶の海部昂蔵氏から、東京の徳川邸に宛てた手紙に『兎角日本人相集居候は一番修業の碍に相成、且つ品行上に取つてもファミリーに超ゆることなしとの論に依り云々』とは、即ち伯の主張を指したのである。而して同じ報告の手紙に『志水(随行員の一人)並僕(海部氏)には一文不通何事も獨立特行出来不申、幸に加藤高明近傍に罷在候間一兩日前よりリードルを稽古に出掛候得共仲々覺はり不申殆んと困却仕候』とある位、殿様の世話から随行員の語學教育まで、伯が一切を引受けた。自然、義禮侯の御傳役のやうな形になり、海部氏なども、一切を伯に委せて翌年早々歸朝して了つた程である(一七七〜一七八ページ)。

ユニバーシティ・カレッジへ留学した日本人たちを詳細に調査した井上琢智『黎明期日本の経済思想——イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化——』(『関西学院大学経済学研究叢書 第三二編』日本評論社、二〇〇六年)には、つぎのようにある。

幕末・明治初期にあって、多くの日本人留学生を引き受けたのは、ロンドン大学、それもユニヴァーシティ・カレッジであった。それには、第一に宗教上の理由、第二に教育上の理由が考えられる。前者については、オックスブリッジ大学はイギリス国教会の教徒にのみ開か

れており、信仰告白が廃止され、非国教徒の入学が認められるのは明治四(一八七一)年のことであった。それに対して、ユニヴァーシティ・カレッジは、ユニテリアンを含む非国教徒のための高等教育機関として一八二六年に創立され、一八二八年に開校された学校であった。そのうえ、オックスブリッジ大学の教育は年額二〇〇～二五〇ポンドを必要とする貴族や富裕な上流階級のための学校で、全寮制を原則とし、古典主義に基づくカリキュラムが中心であったのに対して、ユニヴァーシティ・カレッジは、授業料は二五～三〇ポンド程度で中産階級のための学校であり、通学制を原則とし、そのカリキュラムも一九世紀の科学主義運動に対応した、まさに中産階級の人びとが必要とする実践的な科学・医学・技術教育を目標とする高等教育機関で、ベルリン大学の創立に関与したフンボルト(略)のネオ・ヒューマニズムの影響を受けた大学であった。法文学部(略)、医学部(略)および病院を擁し、一八七〇年にA.W.ウィリアムソンの努力により理学部(略)も新設された。加えて、オックスブリッジ大学のように、入学に際してギリシア語やラテン語の試験が課せられることもなかった。したがって、「ユニヴァーシティ・カレッジは、イギリス人にとって開放性をもつ大学であったと同時に、日本の留学生にとっても、就学の機会をえられやすかったし、また、西洋の科学・技術の教育を修める高等教育の場として、このカレッジがもっともふさわしかった」のである(三〇ページ)。

そして、「幕末・明治初期に日本〔人〕の留学先として重要な役割を果たしたユニヴァーシティ・カレッジへの留学者を、幕末から同カレッジが日本の近代化に果たした役割の変化が確認できる一八八八年度までに限り年代別にみておこう」(三七ページ)として、徳川義禮らの留学を史料によって確認している。

一八八四～一八八五年

この間の留学生は添田寿一と徳川義礼の二名が確認できる。(略)徳川義礼(在籍名：Tokugawa,Y.A.,確認在籍：一八八四～八五、一八八六～八七)は、帰国後貴族院議員となった(四六ページ)。

一八八五～一八八六年

この間の留学生は四名で、堀鉞之丞、野呂景義(一八五四～一九二三)(略)である。堀鉞之丞(在籍名：Hori,E.,確認在籍：一八八五～八六、一八八八～八七)は、帰国後衛生試験所技師となり、のちに第一高等学校教授となった。野呂景義(在籍名：Noro,K.,確認在籍：一八八五～八六)は、フライブルク鉱山大学にも留学し、帰国後、東京大学准教授をへて、帝国大学工科大学教授として、鉄冶金学を教える一方、農商務省技師を兼ね、官営八幡製鉄所の設立計画原案を策定、日本鉄鋼協会を設立しその初代会長となった(四六～四七ページ)。

一八八六～一八八七年

この間の留学生は二名で、堀鉞之丞が継続して二年目の在籍、徳川義礼が二年目である(四七ページ)。

二　帰国後の徳川義禮

(一)　ユニテリアンの告白

徳川義禮は、帰国後、信仰告白を二度にわたって行なっている。『愛知

学芸雑誌』に相次いで掲載した二つの文章、「ユニテリアン教ヲ信スル理由」(「エムマニュエル述」)(第一〇号、明治二二年一月)、「再ビユニテリアン派ノ性質ヲ論シテ余ノ此宗派ニ入リシ所以ヲ陳ブ」(「マーキス、エムマニューエル述」)(第一一号、明治二二年二月)が、それである。

『愛知學藝雑誌』は、明治二一年四月一五日創刊で、「愛知學藝雑誌發兌主意書」(第壱號)には、つぎの内容が書かれている。

「尾参ノ同志相謀リテ愛知學藝雑誌ヲ發兌セントス」

「目的ノ大要」

1「學問ノ隆起」

2「進取敢爲ノ気象」

3「共同一致ノ力」

「尾張先進ノ士ハ愛育社ナルモノヲ設ケ同郷人ノ東京ニ留学スルモノニ學資ヲ貸與セリ」

また、同号の「愛知學藝雑誌社規則」には「第九條　本社ヲ東京麹町區五丁目九番地ニ置キ總テノ事務ヲ取扱フ」とあり、以下の記載がある。

「持主兼編輯人　辰己小次郎

印刷人　山田研一

發行所　愛知學藝雑誌社　東京麹町區富士見町五丁目九番地

地方賣捌所　興文堂　尾張名古屋傳馬町七丁目」

この雑誌に、徳川義禮は、いったい何を書いたのか。この二つの文章は、徳川義禮の信仰告白そのものであり、決定的に重要な文章なので、以下に全文を掲げる。

『愛知學藝雑誌』第十號

遞信省認可　明治廿二年一月十五日發行

[目次]論説　ユニテリアン教ヲ信スル理由

侯爵徳川義禮

○ユニテリアン教ヲ信スル理由

エムマニュエル述

眼ヲ開テ二三年以來社會ノ状況ヲ見ヨ改良ノ論何ソ其紛々タル曰ク家屋ノ改良曰ク演劇ノ改良曰ク女子風俗ノ改良曰ク文字改良曰ク食物ノ改良曰ク何曰ク何ト而シテ殆ント牧擧ニ遑アラス余ヲ以テ之ヲ見レハ皆外形外部ノ改良ノミ未タ一人ノ有ルアリテ精神内部ノ改良ヲ唱導スル者アルヲ聞カス豈浩歎ノ至リナラスヤ然ラハ則チ精神ヲ改良スルノ方法如何曰ク先ツ其目的ヲ一定スルニ如カサル也抑モ孔孟ノ教ヲ奉シテ道徳仁義ヲ唱ヘンカ惜ヒ哉其教旨狹隘近淺ニシテ其説ク所人ト人トノ關係ヲ規定スル現時ノ教ニ止マルノミ假令封建時代ニ士氣ヲ維持皷舞スルニ與テ力アリト雖モ日新文明ノ今日ニ至リテハ固ヨリ之ヲ以テ完全無缺トイフベカラス佛教ヲ信センカ佛教ニ顯密ノ二派アリ顯門中ノ禪宗ノ如キハ意義幽妙ニ過キ靜定沈默ヲ事トシ徒ニ山中隱遁ノ畸人ヲ增加シ毫モ社會ニ稗益アルヲ見ス又淨土日蓮宗ノ如キハ一意ニ題目名號ヲ唱ヘ只管他力ニヨリテ冥福佛果ヲ得ルニ汲々シ反テ「善言善行テ修メス」自力ヲ以テ福祉ヲ求ムルコトヲ務メス斯ノ如キ教ハ皆精神ノ改良ヲ全フスルニ足ラス然ラハ則チ自他兼備ノ耶蘇教ヲ取ランカ耶蘇教ニ諸派アリ舊教ハマリヤヲ拜崇シ新教ハバイブルヲ迷執ス嗟呼マリヤナルモノソレ何者ソ是亦一人ニアラスヤバイブルハ如何ナル者ゾ亦人ノ手ニ成リタル者焉ソ過チナキヲ保センヤ故ニ假令經文無上ノ法典ト雖モ悉ク之ヲ道理ノ明鏡ニ照シソノ是ナル者ハ之ヲ是トシソノ非ナル者ハ之ヲ非トセサルヘカラス然ラスンハコレ所謂妄誕怪僻取ルニ

足ラサル考也余輩ノ信スル處ハ理學ノ証據(Proof)ト實驗(Experience)トニ由ルモノニアリ何ソ迷執ニ陷ランヤ然ラハ則チ哲學ヲ奉センカ哲學ハ理學的ニ出ツルト雖ソノ説ク所高尚ソノ趣深遠殆ント空想ニ近ク常人ノヨク解スル所ニアラス斯ノ如キ者何ソソノ目的ヲ達スルヲ得ンヤ獨リユニテリセン(ママ)教ニ至リテハ理學上ノ理論ト實驗トニ由リ取ルベキ者ハ取リ捨ツベキ者ハ捨ツ解シ易ク入リ易シコレ實ニ精神内部ノ改良ヲ遂クル者ナルカ是余輩之ヲ奉信シテ疑ハサル所以ナリ

(未完)

――は原文のママ、網掛は引用者。

『愛知學藝雑誌』第拾一號

遞信省認可　明治二十二年二月廿二日發行

[目次] 論説　再ビユニテリアン(ママ)泒ノ性質ヲ論シテ余ノ此宗(ママ)泒ニ入リシ所以ヲ陳ブ

マーキス、エムマニー(ママ)エル述

●再ビユニテリアン(ママ)泒ノ性質ヲ論シテ余ノ此宗(ママ)泒ニ入リシ所以ヲ陳ブ

マーキス、エムマニユー(ママ)エル述

何レノ代何レノ國ヲ問ハズ宗教アラサルハナシ、歐米開化ノ中心ヨリ亜非利加蠻奴ノ巣窟ニ到ル迄、各其宗教ヲ有シ信因テ以テ立チ俗因テ以テ化ス、只文明ノ程度開化ノ性質人民ノ感情其志念ノ異同偶然ノ出來事、自然ノ必要等ヨリシテ、或ハ無極(インフィニットラブ)ノ愛ヲ以テ神ノ意ナリトシ、或ハ人ヲ屠戮シテ神ヲ祭ルモノアルノミ、夫ノ無宗教ニシテ神人ヲ敬愛セズ惘愎自ラ遣ルモノハ余其何ノ理由タルヲ知ラザルナリ、我ユニテリアン宗ハ其原始科學(ジョセフプリーストレー)ノ稱道ニアリテ、理化學ヲ父母トシ、進化論(エボリューションセオリー)ヲ姉妹トス、故ニ其神ヲ論スルヤ力ナリト云ヒ、自然ナリト云ヒ、不測ト云ヒ、天然ノ法則ハ神ノ意旨ナリト云ヒ、一モ理化學ト抵觸矛楯スルヲ見ズ、而シテ人若シ神アリヤト問ハ、然リ洵ニ之アリト云ハン、曰ク視得ヘキヤ、曰ク視得ヘキヤ、曰ク聞キ得ヘキヤ、曰ク聞キ得ヘキナリ、曰ク感シ得ヘキヤ、曰ク感シ得ヘキナリ、夫レ山河草木其所ヲ得テ美ニ人獸虫魚其形ヲ得テ生息シ、日月星晨晝夜運テ休ム時ナキハ神ノ力ノ視得ヘキモノナリ、電霆、霹靂、疾風、怒濤、火山、地震ハ神ノ力ノ視得ヘク聞キ得ベキモノナリ、吾人善ヲ爲スニ勇ニシテ悪ヲ爲スニ怯ニ、其原因ヲ考ヘテ其結果ヲ推シ小ハ一身ノ榮枯ヨリ大ハ一國ノ洧(ママ)長スル所以ヲ知ルモノハ、神ノ力ヲ感スルモノナリ、或ハ神ナシトイヒ、或ハ神アリト云フ、其無ト云ヒ、有トイフ只其意味如何ニヨリテ何レト云フモ妨ケナシ、必竟神ノ力洪大無邊ニシテ人類ノ腦力能ク之ヲ描出シ能ハサルガ爲メニ或ハ無ト云ヒ、或ハ有ト云フノミ少シク意ヲ注キテ汝ノ身邊ヲ視ヨ、近クハ汝生存ノ理由ニヨリ、遠ク日月星晨地球ノ運行ニ至リ一モ神力視ルヘク聞クヘク感スヘキニアラサルハナク、所謂之ヲ放テハ六合ニ洽ク、之ヲ卷ケバ則チ退テ密ニ藏ル、ニアラスヤ」(ママ)又我「ユニテリヤン」泒(ママ)耶蘇ヲ論シテ曰ク耶蘇何人ゾ我何人ソ、之ヲ求ムレハ即チ、近ク其己レニアリ之ヲ求メサレハ即チ遠ク去リテ、宵壤相離ル若シ夫レ日ニ過チヲ改メテ善ニ遷ルニ吝ナラサレハ、身躬ラ耶蘇ノミ、只彼耶蘇ハ人間ノ純粋ナルモノ、ミ、其或ハ神ノ子ナリト云ヒ、或ハ吾人ノ父ナリト云フ、所以ノモノハ只是一種ノ譬喩(メタホル)ニ過キズシテ、其道德尚ヲ、言動作リ遙カニ神域ニ入ルヲ云フノミ、我宗泒(ママ)ノ耶蘇ヲ見ル此ノ

如キノミ故ニ我宗派(ママ)ハ學理ノ粋ニヨリ現象ノ玄ヲ探ルモノニシテ或ハ澹泊無味ナリトシテ世人ノ好ミニ投セサル所アラン彼ノ去ル者ハ之ヲ追ハズ來ル者ハ之ヲ拒マス抗スル者ハ暫ラクコレヲ避ケンノミ只我信ニ至リテハ艱難辛苦之ヲ動スヘカラズ毀譽褒貶之ヲ變スヘカラサルモノ我宗派(ママ)ノ主眼ナリ、我宗派(ママ)敢テ之ヲ人ニ勸メズ、只自ラ覺リテ來ルモノ之ヲ拒マサルノミ余熟宗教各派ノ説ク所ト學者名家ノ評論スル所トヲ考ヘ自ラ進テ「ユニテリアン」宗ニ入レルノミ無宗教ハ余ノ欲セサル所ナリ

傍点は原文のママ、ただし傍点は原文では○(しろまる)。網掛は引用者。

イエスを意味するエマニュエルという洗礼名で、「精神内部ノ改良」を掲げてユニテリアンの告白をした徳川義禮の意図は、はたして何であったのか。

(二) ユニテリアンとは

そもそも、ユニテリアンとは、いったい、いかなる教えなのであろうか。『日本大百科全書』第二三巻(小学館、一九九四年)の「ユニテリアン(Unitarian)」の項には、つぎのようにある。

キリスト教正統派の中心教義である父と子と聖霊の三位(さんみ)一体Trinityの信条に反対し、神の単一性Unityを主張し、イエスは神ではないとする一派の人をいう。厳密な意味でのユニテリアニズムUnitarianismは宗教改革後約半世紀たって現れている。一七世紀以後イギリスにおける著名なユニテリアンとしてはビドルJohn Biddle、クラークSamuel Clarke、プリーストリーJoseph Priestly、マーティノーJames Martineauなどがあげられる。アメリカでは、イギリスから移住したプリーストリーによってフィラデルフィアに初めてユニテリアン教会が建てられ、チャニングWilliam Ellery Channingが一八二五年にアメリカ・ユニテリアン協会を設立した。一八六一年にはユニバーサリスト教会と合同して、ユニテリアン・ユニバーサリスト協会が組織された。

日本にユニテリアンが初めて紹介されたのは、一八八七年(明治二〇)矢野文雄によってである(同年七月郵便報知新聞紙上)。一九〇九年ごろには神田佐一郎、三並良(みつなみりょう)、岸本能武太(のぶた)、安部磯雄(あべいそお)らが機関誌『ゆにてりあん』の編集・執筆を行った。『ゆにてりあん』はのちに『宗教』に改題し、さらに日本最古のキリスト教雑誌である『六合(りくごう)雑誌』と合併したが、一九二一年(大正一〇)終刊した。

一九四八年(昭和二三)日本ユニテリアン協会の創立総会が開かれた。またユニテリアンに関連する教会として東京帰一(きいつ)教会(初代会長今岡信一良(しんいちろう))がつくられた。翌四九年日本ユニテリアン協会は日本自由宗教協会と改称し、協会機関誌『創造』を刊行した。機関誌はその後『自由宗教』『まほろば』『創造』と誌名を変えながら発行され続けた。五二年には自由宗教連盟と改称し、国際自由宗教連盟(IARF)に加盟した。IARFは一九〇〇年(明治三三)に創設され、三年に一度大会を開催しているが、一九九九年(平成一一)には「地球共同体の創造　宗教者の使命」というテーマのもとにカナダのバンクーバーで第三〇回大会が開かれた。

一九九九年宗教法人東京帰一教会は、初代会長今岡信一良の没後、

後継者に適当な人材がなく、また会員の老齢化などにより解散した。

［平本洋子］

また、日本のユニテリアンを考えるうえで重要な「ユニテリアン協会」については『国史大辞典』第一四巻（吉川弘文館、一九九三年）に、つぎのように説明されている。

神の絶対性・普遍性を考慮する立場から、超教派的キリスト教運動の展開を導き、のちに各宗教の超教派的協力を主張したユニテリアン運動は、ボヘミヤ・イギリス・アメリカを中心に広がった。本邦では明治十九年（一八八六）矢野文雄が『郵便報知新聞』紙上で紹介したことに始まる。二十年暮、アメリカのユニテリアンからA・M・ナップKnappが運動代表として来日、またその生涯を運動展開と日本紹介にささげたC・マコーレェイMacCauleyも同二十二年に参加したが、同年十一月、邦人会員によって日本ユニテリアン協会が発足し、本部が麹町区永田町に設けられた。翌二十三年、本部は三田に移り、また同年に惟一社から機関紙『ゆにてりあん』も発行された。その第一号にイギリスからの派遣者H・W・ホークスHowkesがドグマ化された信仰を排除して愛による協力を目的とする宗教的本質の探求を説いて、協会運動の方向も固まり、多くの知識人を集めた。同二十四年自由神学校（のち先進学院）が始まり、二十七年の春、運動拠点の惟一館が東京三田に建てられ、その中に第一ユニテリアン教会が開設された。ユニテリアン派であったハーバードを卒業した神田佐一郎が協会設立当初より協会発展の中心となったが、その後、大西祝（はじめ）・岸本能武太・安部磯雄・村井知至ら海外帰朝者で多くは大学・高専の教授となった人々が参加、その知的影響力により、機関紙『ゆにてりあん』（二十四年に『宗教』と改題）は、仏教者も含む宗教的リベラリストの思想的拠点となった。しかし同三十一年、キリスト教系思想家のまき返しもあって、プロテスタント系総合誌『六合雑誌』に統合されたが、同四十二年ころに勢力が逆転し、ユニテリアンの機関紙的存在となり、オックスフォード大学留学中にユニテリアンとなった内ヶ崎作三郎が牧師兼編集者となって宗教的自由主義の論陣をはった。だが、同四十四年、新仏教運動から参加していた佐治実然が別派の統一基督教会を始めたり、安部・岸本らが教育に力をとられ、また内ヶ崎らが政治に関心をむけ始めたこと（のちに衆議院議員となる）もあって大正に入って勢いが下火となり、大正七年（一九一八）運動は解散に至った。なおキリスト教社会主義の流れから明治三十一年に創立された社会主義研究会（のち同三十三年に社会主義協会、同三十四年社会民主党）には佐治・安部・村井・岸本・木下尚江らが参加しており、初期には惟一館が拠点となった。のちに大正元年には同じユニテリアンの鈴木文治が友愛会（のちの日本労働総同盟）を創立、惟一館を利用したこともあり、ユニテリアン協会は日本社会主義運動の出発点となったといえる。第二次世界大戦後、東大教授岸本英夫（能武太の息子）が今岡信一良と協力してユニテリアン運動を復興、芝の正則学院内に帰一教会をたて、日本自由宗教運動と宗教協力運動の核となった。

［参考文献］

松本三之介編『明治思想集』一・二（『近代日本思想大系』三〇・三一）、今岡信一良『人生百年』、鈴木範久『明治宗教思潮の研究』、岸本英夫編『明治文化史』六、安部磯雄『社会主義者となるまで』、同志社大学人文科学研究所編『『六合雑誌』の研究・総目次』、片山哲『安部磯

雄伝』、佐波亘編『植村正久と其の時代』、Clay MacCauley:Memories and Memorials.

（井門　富二夫）

（三）英国のユニテリアン

徳川義禮が受容した英国のユニテリアンとは、はたして、いかなる特質を有しているのであろうか。彼の告白にある「ジョセフプリーストレー」(Joseph Priestly)が、重要となる。

『日本大百科全書』第二〇巻（小学館、一九九四年）には、つぎのような説明がある。

プリーストリー

［一七八三―一八〇四］

イギリスの神学者、化学者。初め長老派教会（カルバン主義によるプロテスタントの一派）の牧師であったが、しだいに正統派カルバン主義を排して、神の単一性を主張し、三位（さんみ）一体に反対し、イエスは神でないとするユニテリアニズムの見解をとるようになった。一七八二年に『キリスト教頽廃（たいはい）の歴史』History of the Corruptions of Christianityを出版したが、1785年に公権によって焼かれた。一七八六年『イエス・キリストに関する初期の歴史』History of Early Opinions Concerning Jesus Christ、一七九〇年に『西ローマ帝国崩壊に至るキリスト教会史概観』General History of the Christian Church to the Fall of the Western Empireを刊行した。これら多くの著作による正統派への激しい神学攻撃によって反発を受け、一七九一年フランス革命に共鳴したため家や研究室が破壊された。このためロンドンに逃れ、一七九四年アメリカに移住し、一七九六年フィラデルフィアにユニテリアン教会を創立した。一方、進歩的文化人であるワットやダーウィンらと交遊し、ベンサムらにも影響を与えている。また植民地政策や奴隷売買などにも反対した。

［平本洋子］

さらに、舩木恵子「一九世紀イギリスにおけるユニテリアン・フェミニスト――信仰、自立そして経済学――」（『ピューリタニズム研究』第四号、二〇一〇年）には、ユニテリアンの特徴として、イギリス経験論の発展と平行してその勢力を拡大したこと、イギリス近代科学の勃興や啓蒙運動と同一歩調をとったこと、一八一三年に公認され、一八二五年にイギリス・ユニテリアン協会が設立されたこと、道徳的自由主義であることが指摘されている。また、大石和欣「女性の慈善とバーボールドの曖昧な「公共心」～ユニタリアン文化のジェンダー問題」（『放送大学研究年報』第二三号、二〇〇五年）は、ユニテリアンを「理性的非国教徒（Rational Dissent）」であるとして、合理的な知性と倫理観、国教会や政府の道徳的腐敗には批判的、道徳的美徳の実行、社会へ訴える影響力を特徴としてあげている。

（四）ユニテリアン・ミッション

ところで、英国ユニテリアンと米国ユニテリアンとの相違を指摘した土屋博政は『ユニテリアンと福澤諭吉』（慶應義塾大学出版会、二〇〇四年）において、矢野文雄が徳川義禮へ宣教師派遣を要請したことを明らかにし（六九～七〇ページ）、森有礼、吉田清成、金子堅太郎らが米国ユニテリアン協会

へ宣教師派遣を要請して、ユニテリアン宣教師のナップとマッコーレーが来日したことを指摘している。

（五）　徳川義禮の議会活動

西尾林太郎の論考「貴族院多額納税者議員鎌田勝太郎――貴族院改革を中心に――」（『（愛知淑徳大学）現代社会研究科研究報告』第三号、二〇〇八年六月）によれば、「明治二〇年代および三〇年代において、公爵近衛篤麿、侯爵二条基弘らが三曜会で、侯爵伊達宗徳、侯爵徳川義礼らが懇話会なる会派を組織しまたは会派に参加して、世襲議員が貴族院議員として大いに活動した」（六三ページ）という。懇話会は、『国史大辞典』第六巻（吉川弘文館、一九八五年）によれば、つぎのように説明されている。

貴族院の院内団体。結成年月日は不詳であるが、明治二十四年（一八九一）末の第二議会において、三曜会・研究会とならんで「勤倹尚武連」と呼ばれたものが翌二十五年中に院内団体を結成したものと思われる。同年十一月召集の第四議会には五十名の議員を擁する院内団体として登場している。中心的な指導者は、谷干城（子爵議員）・曾我祐準（同）・山川浩（勅選議員）・三浦安（同）らで、三曜会とならんで貴族院における反研究会派を構成していた。第六・第七議会における「硬六派」の運動に参加し、また第二次松方内閣・第一次大隈内閣に対しても好意的態度をとった。反藩閥、特に反伊藤（博文）であり、改進党→進歩党→憲政本党には比較的好意的であった。第四議会以降の所属議員数は次のとおり。第四（五〇）、第五（五三）、第六（六三）、第七（五九、推定）、第八（五九）、第九（四七）、第十（四二）、第十一（五二、推定）、第十二（五二）、第十三（五九）、第十四（六八）、第十五（四〇）。明治三十四年十二月に朝日倶楽部と合併して土曜会を結成。

［参考文献］伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』二、花房崎太郎『貴族院各会派の沿革』、酒田正敏編『貴族院会派一覧――一八九〇―一九一九―』（『日本近代史料叢書』C二）

（坂野潤治）

徳川義禮が矢野文雄と関係があったとすれば、徳川義禮は、目前に控えた議会政治のなかで、英国流の政治改革をめざしていたのではないかとの推測も成り立ちうるかもしれない。

おわりに

ユニテリアンの告白を行なった徳川義禮がめざした「精神内部ノ改良」とは、いったい何であったのか、そして、彼は、どのような社会改良をめざしたのか。

彼の英国留学時代そして帰国後の数年間は、日本の立憲体制成立期に相当する。有力華族である尾張徳川家第十八代当主の徳川義禮の動向を、徳川林政史研究所所蔵史料はじめ、さらなる史料の発掘により解明することが、今後の課題となる。

謝辞

本稿の作成にあたっては、徳川林政史研究所の皆さんから種々ご教示をいただいたほか、徳川黎明会総務部非常勤学芸員の香山里絵さん、徳川家古写真整理に従事している井芹啓子さんから史資料をご教示・ご提供いただくとともに、ご助言をいただいた。記して感謝を申し上げる。